



Q16

高等学校における LD・ADHD生等への対応は？

まずは
ここから



- 複数教職員がかかわるチームをつくります。
- 養護教諭等のコーディネートで専門機関と連携します。

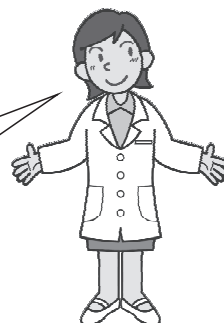
高等学校に進学したミナコさん。突然パニックを起こすことが多く、教職員やクラスメートにとっては、理解できないことが多くありました。

- 中間考査の結果に「どうして私はこんなに馬鹿なんだ」と大泣きして教室を飛び出す。
- ホームルームで「私なんかいない方がました」と、4階から飛び降りようとする。

教員たちも「とても落ち着いて授業をすることはできない」と頭を抱えてしまいました。ここでは、養護教諭がキーパーソンとなって行った支援を紹介します。

養護教諭のかかわり

- ① ミナコさんと悩み事についてゆっくりと話をしました。
- ② スクールカウンセラーに継続的な相談を依頼する際の仲介をしました。
- ③ スクールカウンセラーに助言を受けたパニックのときの基本的な対応法を、校長・教頭・担任に報告し、全教職員が周知できるようにしました。
- ④ 療育コーディネーターへの相談を仲介しました。



療育コーディネーターからのアドバイス



- 生徒を正しく理解し、行動の背景をつかむこと
- 医師の診断を受けることが基本となること
- 学校として、二次的障害の防止に努めること
- 必要に応じて法的保護も検討すること

二次的障害とは：

障害に直接起因しないもの。周囲の不適切な対応によって、新たな不適応等が生み出されること。

そこで、養護教諭がスクールカウンセラーに経緯を報告すると、「保護者へ受診を勧めたい」と、受診の必要性を保護者に説明してくれました。養護教諭が病院に同行し、病院の医師及び言語聴覚士に連絡をしました。高機能自閉症という診断があり、本人はかえって安心したようでした。服薬を始めるとともに、自分の障害についての説明を聴いて理解を深めたためか、パニックも減少していきました。



【キーポイント】 高等学校では、コーディネーターの指名がありません。校内委員会も未設置です。しかし、複数の教職員がかかわる支援チームをつくることは可能です。養護教諭の外、教頭、学年主任等がキーパーソンになります。

● ミナコさんの小・中学校のときのプロフィール

小学校 ① 5年生までは、通常の学級で学習していました。
 ② 6年生の時、知的障害自律学級が開設され、入級しました。本人は「人数が足りないから入れさせられた」と言っています。

中学校 ① 知的障害自律学級で学習しましたが、「楽しい思い出はない。心の傷になっている」と言っています。
 ② 進路指導では、児童相談所への相談や養護学校の見学等を勧められましたが、保護者も本人も拒否しました。

中学校卒業時には、全日制高校を受検し、合格しました。しかし、小・中学校の情報が高等学校に伝達されることがなく、個別の支援体制を整えておくこともできませんでした。

● 高等学校における支援チーム

養護教諭がコーディネーター役を果たし、療育コーディネーターの助言に基づいて組織された高等学校における支援チームです。

校 長…校内体制づくりのマネージメント
 教 頭…小・中学校からの情報収集
 学級担任…本人・保護者と面談して支援（学年担任・教科担任と連携）
 養護教諭…コーディネーター役、校外機関との連絡調整（スクールカウンセラー・保健師・医療機関・学校医・その他）

このケースで、養護教諭は、町の保健師とも懇談を行っています。保健師が家庭に介入することで、家庭内でパニックが起こったときも、父親の暴力がなくなり、落ち着いた生活としていく助けとなりました。

● 教員や同級生の障害に対する理解

支援チームによる対応が始まる前、ミナコさんは他の生徒が注意されるのに反応して「怖いよ～」と、パニックになることがよくありました。クラスメートは、はじめは、ミナコさんのパニックを止めようとしていました。しかし、パニックがエスカレートし、教材を蹴り飛ばしたり、授業に参加できないことが増えたりすると、「またか」と無視するようになっていきました。

ミナコさんの障害に対する理解をこのような生徒にも進めることで、支援者の輪が広がると期待されます。

療育コーディネーターとは：長野県の10の福祉圏域に設置された障害者総合支援センターに配置されており、主に乳幼児期からの療育に関する支援を行っています。障害に対する知識があり、必要に応じて関係諸機関に相談をつないでくれます。